

AYANO REPORT

去年から ANDADURA の手伝いをはじめました、山本綾乃です。
今までは家の隣に工房があったので、なんとなく主人の仕事は見たことがありました。
実際に関わってみて、自分の手を動かしてみても、
その難しさや、細かさにびっくりしました。
今もまだ初心者マークをつけながら作業しています。

今回は、ANDADURA・山本の隣からみた風景や、日常の様子をお伝え出来たらと思い、
この文章を書かせてもらいました。

ひとつの財布を見ると、それは財布でしかないけれど。
その奥にいろんな人がいて、さまざまな行程があって、たくさんの時間や、誰かの人生
があるなあと、この文を書きながら思いました。
手に取ってくださる方がいること。
使ってくださる方がいること。
販売してくださる方がいること。
とてもありがたいなあとしみじみ思います。

普段は表には出ない、もしかしたらそんなに出さなくてもいいものかもしれないけれど。
興味ある方、読んで頂けると幸いです。



「筆箱をつくるから会社を辞めます」
はじめて出会った日、山本さんはそう話していた。
あれから、今年で12年経つ。

あの頃のエキセントリックさはすべて、
「ものをつくる」という行為に変換されているような気がしている。

ものをつくることに関してはどんな時もまっとうで。
制作に関して、時に昭和の親方のようにであり。
新作づくりは、少年のように新しい形をつくりたくてつくりたくてたまらない人。

それが、私の目に映る山本さんである。

彼の頭の中には何かあるのだろう。
いつも動かしているインクだらけの手から、これ先どんなものが生み出されるのだろう。

隣に居る私も楽しみに思う。



歩く

ANDADURA はスペイン語で「歩く」という意味らしい。

「アンダデューラ」と発音すると思っていたら、スペインに留学していた父が「アンドゥーラッ」と巻き舌で発音していてびっくりした。本場は情熱の国だ。

立ち上げ前に、**about us** に書く予定のメモをどこかになくしてしまったと連絡があった。偶然、彼の部屋の床に落ちていたメモが良くて写真に撮っていたものがそのことばで。詳細は知らない私の心にも残るものだった。

「歩くことで、素になっていく
歩くことで、浮かび上がってくるモノがある
歩くことで、形を成していく私がいる」

歩くようなものを作っていきたい。

そんな山本さんの意志は、やってみるから出来あがっていくことがある、という彼の真髓に通じていると思う。



*写真は試作品を時系列順に展示したものです。

コンパクト財布の旅

テイク14で完成したコンパクト財布。

毎日スーパーに行くとき使用して、納得いくまで調整する様子は、彼らしいなあと思った。

新作を作る時は、家に帰るとこたつの上にボンと試作した財布が置いてある。

あたらしい形が詰まってくると、何も言わずそっと置かれる試作品。

私は思うことを遠慮なく伝えるから、その言葉に鬼の形相になる事も多々あるけれど。思い出せば、テイク1から随分形が変わった。

「新作作りはどんな旅よりも、旅だと思う」

そうつぶやく山本さん。

インドアな彼が、どこまでもアウトドアに見える瞬間でもある。

試作する。

使いやすいように形を変更する。

試作する。

また変える。

テイク14からさらに試作して最終的にはテイク19まで試みた。

5つ戻って完成形。

財布を巡るたびの終わりに、新作があるということなのだろうか。

歴代の工房

山本さんの工房は今の工房で3カ所目になる。

マンションの一室からはじまった **ANDADURA** の工房を辿ってみる。

- ・ 1カ所目（神奈川県川崎市、登戸）



ベランダから多摩川が見えるマンションの一室。

多摩川の石からパターンをひいてコースターを作ったことも。

- ・ 2カ所目（栃木県、益子町）



大家さんがいつ建てられたか分からないと話していた古いぼろぼろのお家。

小さな畑があって、愛嬌のある家だった。

・3カ所目（岡山県総社市）



今回はじめて自宅と工房が別の場所になった（車で10分程度）
大きな倉庫の中に白いテントを立てたマトリョーシカのような工房。
二つ繋いで25畳くらいの広さである。

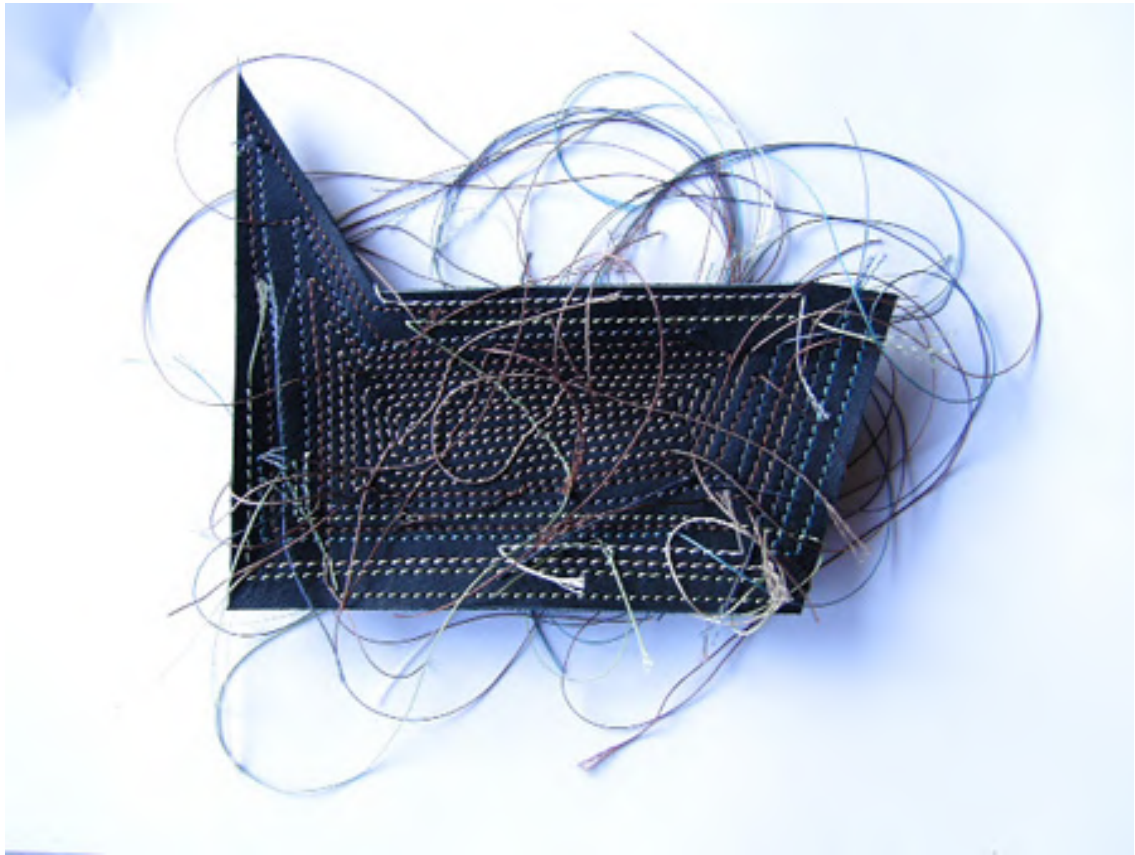
どの工房も共通して、夏はうだるように暑くて、冬は凍えるように寒い。
室内で熱中症になって病院を渡り歩くことも。
冬、寒すぎて「野良犬になった気分がするね」と話している事もあった。

それでも。
どんな条件でも、その場所がどうしたら使いやすくなるか常に考えているようで。
少しずつ使いやすいうように整えていく。

「その環境の中でできることが今できること。だから足元作業が大事」

彼がよくつぶやいているから暗記してしまった言葉のとおり。
場所も大きさも変わって来たけど、どの工房も **ANDADURA** らしくて、知恵の塊みたい
だと思う。

30代だから、体力と健康づくりは必須だねと話しながら。



工房の断片

ミシンの試し縫いの革。

工房から毎日出るかわいい断片。

山本さんに革についての質問をしてみる

①良い革ってなんですか？

牛革、豚革、ラクダ革。世の中にはいろんな革があって、値段もピンキリだと思う。一枚の革の中にも様々な部位がある。その中で山本さんの思う良い革ってなんだろう。そんなことを思って聞いてみた。

山本：つくりたいものが浮かぶ革が良い革だと思う。あと、製品に合っているもの。例えばお財布なら始めた時よりも革の厚みがある素材を使うようになったのは、その方が製品に合っているから。

佐藤さん（革屋さん）から革が届いて広げて見た時に傷が無くて使いやすい革だといいなあと思うけど。

革屋さんの考える良い革は、革としての良さだと思う。

作り手としてはやっぱり革をみて「つくりたい」と思えるかどうかだと思う。

②イタリアの革もあるけれど、なぜ日本の革でつくるのですか？

イタリアの革は安定していると聞き、見せてもらおうと確かに美しく安定した素材だと思った。イタリアの革を使うのもいいと思うけどやっぱり国内の革をと選択する山本さんにその理由を聞いてみた。

山本：国内の革だと素材づくりから出来ること。自分でオリジナルの革をつくってみたい。やはり佐藤さんとの出会いが大きいと思う。もし佐藤さんが居なかったら、イタリアの革を使っていたと思う。

③製品において素材における割合はどれくらいですか？

料理だってよい素材じゃないとおいしくならないように、革製品も素材ありきということとはよく分かったけど、大体どれくらいだと考えているか聞いてみたいと思った。

山本：大体8割くらい。それくらい大きいと思う。

革屋の佐藤さん

山本さんは真剣な顔つきで時々長電話をしている。
相手は革屋の佐藤さんだ。

佐藤さんと、山本さんの関係は小さな舟を共にこぎ合う乗組員のような間柄だと思う。

7年前、革の工房から独立して **ANDADURA** をはじめた山本さん。
当時、革の間屋会社で働いていた佐藤さんは **ANDADURA** の担当さんだった。
その後、佐藤さんは急遽革の職人として独立する事になる。

「仕事をするのならいい革が作りたい。」

どちらがキャプテンというわけではなく、二人の舟にはそんな活気があふれている。
まずは姫路の革。
そして栃木の革。
染料の入れ方。
ドラムの回し方。
オイルの入れ方。

どれだけ話し合っていたのか私は知らないけれど。
山本さんは佐藤さんとはなすために携帯電話をかけ放題にした。



革が届く度に、私は通知表を見る前のようにドキドキする。

革はナマモノ。

山本さんはよくそう言っている。

もともと生きていた動物の皮だから個体差もあれば毎度違う。

個体差があると聞いてはいたけれど、こんなにも色や柔らかさや厚さが違うの！？
とびっくりした。

赤みがあったり、傷部分が多かったり。

これは同じ革なのだろうかと思う事もあった。

でも、どんな革が来てもすべて買い取らせていただくこと。

ここだけは変わらないでやっているらしい。

返品がすぐに出来る時代だけど、つくっていただいた革は買い取る。

オリジナルで素材を作ってもらっている職人さんとの信頼関係は本当に大きい。

いい革があがった時に彼の顔は

「生きていて良かった」

そんな風を書いてあるように見えた。

原型

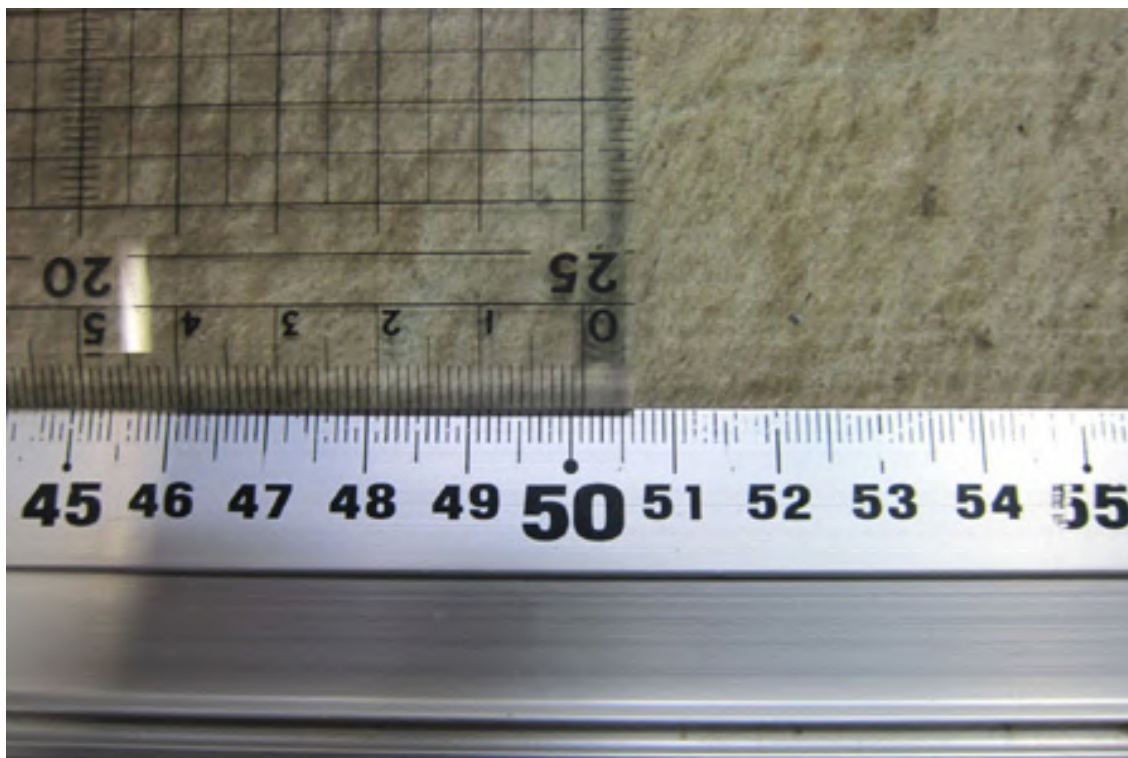
片付けをしていたら10年位前に山本さんからもらったものが出てきた。
よく見てみると、今の形の原型みたい。



ペンケース



小銭入れ



定規とじょうぎ

定規で定規を計っている彼をみた。

どうやら1メートルで2ミリずれているらしい。

プラスチックの定規が一番正確なのではと話をしている彼を横に、ざっくりな私は竹のものさしがすきだったりする。

みることについて 1

山本さんの仕事の手伝いをはじめた。

私の仕事は革の断面を磨く作業である。

ヤスリをかけたり、オイルを含ませた布で磨いたり。

黙々で行うこの作業は、製品づくりの4割近くを締めている。

見えにくいけれど、製品のクオリティーにかかわる基礎部分である。

山本さんから作業行程について丁寧に説明を受け、そのメモを見ながら手順通りに作業をすすめる。

が、これがなかなかうまく行かない。

同じようにみえるけど、全く違う。

当たり前といえばあたりまえだけど、どう手を動かすのがよいか考えてしまい、分からなくなってしまった。

そんな私をみて、彼はひとこと。

「ものを見ていない」と言った。

「ものを見る？ 私なりに見ながらやっている。

教えてもらったメモ通りきっちりやっているんだけど」

ものを見るという意味が分からなかった。

工房に気まずい空気が流れそうになると、

「今日はもう帰っていい。そんな気持ちでしなくていい」

と、昭和の親方のような口調で。

泣きたくなって帰ろうと思った日に言われた言葉。

「あんたを否定してるんじゃないくて、いいものをつくりたいだけだから、そっちをみてほしい。手を動かすことは、やっていれはうまくなるから。」

なんだか、方向が見えたひとことでもある。

正しいやり方や正解のやり方をしたいのではなくて、よいものをただつくりだけ。

意外にシンプルだった。

そこから、簡単なパーツをひとつひとつゆっくりと磨く作業にやり方を変える。

今自分の磨いている、この手で触っているパーツはどんなかんじなのかひとつひとつをちゃんと見てみる。感じてみる。固いのかな。なんで磨きづらいのかな。

ここは早く手を動かした方がいいみたい。確認しながら作業する。

繰り返すこと二ヶ月。

親方から

「あんたもだんだんみることができるようになってきたね」

の言葉をかけられた日。なんだかうれしかった。

どうやら 3 日で覚えると思った仕事に私は 2 ヶ月もかかったらしい。

みることについて 2

教えてもらったメモをみるのではなくて、目の前の素材をみるようになったとき、はじめて褒められた。

最後の仕上げは山本さんが行う。

つくるのならば、良いものにしたい。

小さな事に手を抜かない。

その姿勢はどんな時も変わらない。どれだけ疲れていても。

時間がなくても。

やるならやる。

そこは常に一貫していると思う。

ある時いわれたことば。

「つくることはみることから始まる。

だから、あんたにもものをみれるようになってほしかった」

山本さんの言う「みること」を私なりに解釈してみた。

自分の身体と、頭をつかってみつめること。

ひとつひとつ。

そんなかんじだろうか。

今の私は、そんな風に思っている。

生活のしぼりかす

山本さんはお家の布製品も自分でつくることが多い。

カーテンや座布団カバー、布団カバー。

新しいお家に来てからも、いろいろお家のものを作った。

どうやら、暮らしを整えることは「制作すること」と繋がっているようなのだ。

暮らしの中でずっと考えていることが形になるから、製品としてでてくるのは生活のしぼりかすみみたいなものなのだと。



コーヒーのこと

山本さんはコーヒー好きだ。

毎朝一番にコーヒーを淹れる。

5年前くらいに小さな焙煎機を購入して以来、生豆研究が始まった。

焙煎中は回っている機械の様子を確認するため床に張りついている。

だんだんと定番の豆を定めて、生豆を買うお店も固まった。

忙しくても、引っ越し中でも、コーヒー豆だけは切らさず焙煎から淹れるまで行っている。時々「それ今必要？」と問いただしてしまったりするも、全く気にしていないみたいで、変わらずコーヒーのことをしている。

そのおかげで、欠かさずおいしいコーヒーを飲めるようになった。

どんな時も研究して続けてそれなりのクオリティを出してくるところは山本さんらしい。

そんな我が家の日常飲料だ。



移住日記

益子から岡山に引っ越しして1年半が経った。

あっという間のようで、ようやくいろんなことに慣れて来たともいえる。

今回の移住にあたって、かれこれ2年くらい移住先を車に乗って探し歩いた。

彼の生まれの広島や、私の故郷の愛知周辺からはじまり。

いろんなご縁で岡山に辿り着いた。

振り返ってみると、ひとつのことを思い出す。

それは、山本さんが久しぶりにレザーフェアに行くと言って東京から帰って来た日。

野生動物みたいな目をした彼が

「いい素材を見つけた！ビニロンという素材。それでいつかリュックを作りたい」と言う。

この感じは、筆箱をつくるから会社を辞めるといった在りし日を思い出す勢いがある。

話を聞いてみると、その素材は岡山で作られていた素材のようだ。

「それなら、岡山もありだ。移住候補に岡山を入れよう。ピンときた！」

そんな会話をした。

いろんな方が力をかしてくださったから出来た今回の移住。

お家を斡旋してくださった方、工房を見つけて来てくださった方、移住の時にいろんな人を紹介してくれた友人たち、大家さん。

ご縁がある場所に住むし、住めば都なのだと改めて思う。

そしてこれから。

ビニロンのリュックサックまではまだ時間がかかるかもしれないけれど、この土地から良いものを作っていきたいと思う。

いつか、いろんな方にこの場所に来て頂きたいと思う。

工房づくりの風景

はじめてこの工房に連れて来てもらった時はガランとした倉庫だった。
そこからいろんな資材が入って、だんだんと工房になっていく。
その過程を追ってみました。

①工房の全体（こんなところで作業しています）



②はじめて訪れたとき、そこはまだ倉庫だった。



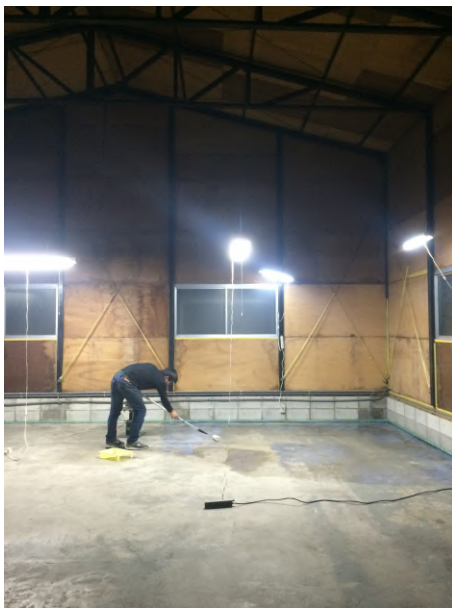
③引っ越しでまとめた荷物がどんと届く。



④まずは倉庫の梁を使って照明を下げることに（その後、やり方変更することになる）



⑤床にシーラーを塗ったり、壁の色を白にするため、再度資材を移動させる。



⑥ベースが整った。（3×6 m のテントを二つ並べて建てるため、床にマークをする）



⑦資材の位置を調整しながら確定させてゆく。



季節は10月末、だんだんと寒くなってくる。いそげ、そんな気持ちで。



⑧引っ越しから 10 日後。テントが届くまで、倉庫の一角で工房が動き出す。
しばし、テント待ちのままスタートすることに。



⑨12月、引っ越しから2ヶ月が経ち待ちに待ったテントが届く。
照明を付け替えし、模様替えをして。ついに、完成。



・ おまけ

工房の裏は沢になっている。竹が生えていて気持ちのいい場所。
ここでお昼ごはんを食べるのもお気に入りだったりする。



山本さんの文章をひとつ。

これを読むと山本という人と、彼のものづくりの姿勢がみえる。

以下 **ANDADURA** の 2010 年 06 月 04 日のブログより。

↓

以前ある人に、「プロダクトと作家のちょうど良い間にいるね。」

とおっしゃって頂いた事がある。アンダデューラのモノを見て頂いた時の話である。
嬉しかった。

プロダクトよりは暖かみを持たせたいし。

作家という程、個人のモロモロを反映させたくはないし。（というか、自然にできればと思うので。）

常々思っていることである。だから嬉しかったのである。

そんな事を思ってたら、土井さんの事を考える。

土井さんは僕の中の工場長である。

土井さんは、電車を乗り過ごす事も無いし、

ましてや、反対方面の車両に乗り込む事も無い。

天候によって、気分が著しく変化する事も

スキップしながら、鼻歌を歌いながら夜道を散歩する事も

パスタを茹ですぎる事も無い。

そう、土井さんは、現実の人なのだ。

僕の中の現実の人、土井さん。

土井さんはピシャリと言い放つ

「カッコ良いなんて、結果論だ。」

「カッコ良いなんて、モノを成り立たせる要素の一つでしかない。」

そう、土井さんは総合の人でもある。

僕の中の総合的人格、土井伸二（フルネーム！！）。

土井さんは工場を回してゆくため、

いろいろな事を考える立場にいる。

クレームがくれば、丁寧に真摯に話をし、

納期が厳しければ、外に仕事を回したり、

そんなもろもろが、得意なのだ。

僕が、かっこいいを求めすぎると、
「おまえさあー、かっこいいなんてもんは…」
と、言い放つ。

そんな土井さんが、煩わしい事もある。しかし仕方が無い、
僕だって土井さんを頼りにする事だってあるのだ。

確かに、カッコいいなんて、一つの要素だと思ったりもする。（土井さんのせいだ）
自分でそっち（かっこいい）になびき過ぎてるな、と感じた時は、

「土井さん！！作業着」
と土井さんに作業着を脱いでもらい、心に作業着を着る。

土井さんは、そういう事に無頓着だから、作業着は汚い。
ヒゲだって、いつも、季節はずれのつくしの様にまばらに生えている。

土井さんの作業着を着た僕は、
想像で、新宿駅に飛ぶ。新宿駅で汚い作業着姿の自分。特に用事も無く、
ただただ、佇む、作業着の僕。

うん。限りなく孤独だ。孤独でいて切なくもある。
切なくてリアルだ、現実だ。土井さんの日常だ、と思う。
そうすると、自然に
「かっこいいなんて、モノを成り立たせる、要素の一つでしかない。」
と体得できるのだ。

だから
「プロダクトと作家のちょうど良い間にいるね。」
という言葉は
「土井さんとヤマモトのちょうど間」と読み取る事も出来る。

土井さんと僕の共同作業。

とここまで書いて、二重人格的な文章はなんなんだ、と思いはじめた。
ひかれるではないか。これでは
しかし、「気持ち悪さも、一つの側面さ。」と言う土井さんに背中を押してもらいアッ
プします。